
断罪者

MON太やき

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

断罪者

【Nコード】

N1022B

【作者名】

MON太やき

【あらすじ】

ある日、主人公真東信也の住んでいた街が一人の男に壊滅させられる。そんな中、運良く生き残ったが体の動かない真東は街を壊滅させた男と出会う。しかし、男は真東を殺さずに自らと同じ存在へと真東を変えた。その日から真東は人をやめ罪深き者として生きることとなる。

ブローグ

息が苦しい。

意識は朦朧として、起きているのか寝ているのか自分でもわからない。

体は重く壁にはりつけにされているように指一つ自由に動かせない。ただ、とてつもない悪臭に鼻がどうかなってしまいそうだった。体が動かせないせいで鼻を押さえることもできない。

「お目覚めか？」

おれの思考に割って入るように声が聞こえた。どこか、憎たらしい声。すると、どれだけ、開こうとしても開かなかった目がその声に導かれるように自然と開く。開いた目に入ってくる眩しい光におれは目を閉じたくなかった。

おれの目の前には一人の男が立っていた。白いシンプルな仮面を被っていて表情がわからない。だが、何故だろう？おれには、この男は笑っているのだとわかった。

おれは、男の手元に視線を移す。その男の手には、ゴツゴツとした岩石のような黒光りする物体が握られている。

「周りをご覧なさい。あなたが、唯一の生き残りですよ」

そう言われ辺りを見渡す、酷かった、いや、言葉では表せられない惨劇がそこにあった。ほんの少し前までは特に何の問題もなく平和だったはずの街。今では、家々は炎上し、人は惨殺され、大地は荒れ果て、まさに地獄と言ってもいいほどだ。男の言うとおり、おれは、この街の唯一の生き残りになってしまったのかもしれない。

そのことに気づいたおれを馬鹿にするように男は数回拍手をする。「どうしたのです？せつかく、生き残っているのですから、もっと胸を張ればいいのに」

おれは、すぐに理解した。この男が街を壊し、人を殺し、そして今、無惨にも生き残ってしまったおれをじっくりといたぶろうとし

ているのだと……このままいたぶられ続けるのなら死にたいと願う。だが、おれの情けない体はそれさえも許してくれない。男は、苦痛と精神的に追い詰められ、顔を歪ませるおれを見て笑い声をあげる。

「てめえ！」

怒りに身を任せおれは男に吠える。

男はおれを見下して不敵な笑みを浮かべると何か注射器のようなものを取り出した。

中身の液体は、赤とも青ともどんな色でも言い表せれない不思議な色をしている。

「私が憎いですか？」

おれを地面に押さえつけた男がくだらないことを聞いてきた。「当たり前だ！ 絶対、殺してやる」

歯を噛み締めながら男に力強く言うところを聞いた男は苦笑するように体を震わせて握っている注射器をピストルのようなものに装着するとおれの首すじに突きつける。

男に体を押さえつけられたおれは、ただ、男を睨みつけることしかできない。

「そう睨まないでください。せつかく、面白いことを思いついたのですから」

「面白いこと？ ふざけんな、この殺人鬼が」

それを聞いて、男は人をバカにしたような拍手をする。だが、男の口から予想外な言葉が出てきた。

「私はあなたを見逃してあげるつもりです」

おれが、信じられないと顔をしかめると男はさらに続ける。

「ただし」

そう言うと、注射器の入ったピストルの引き金に力が込められ、カチリと音をたてる。

「あなたにも、私たちと同じ存在になつてもらいましょう」

「やめっ」 もがこうとするおれの首もとが万力のように絞められ

るとパスンという間の抜けた音とともに何かがおれの体に入ってきた。

「ッ」

あまりの激痛に体が跳ねる。おれの脳が心臓が髪の毛さえおれの体の全てが拒絶の反応を示す。

これを受け入れてはならないと……

だが、体に打ち込まれた何かはおれが嫌がろうと関係なく、血液を通して体中に染み渡っていく。

「ぐっ」

体が溶けてしまいそうなほど熱い、水分を搾り取られたように喉が渴きを訴える。指や唇は痙攣して、肺に潰れたかと思うほどの痛みがはしる。

「安心してください、当たり前なら、痛いのは初めだけです。直に、痛みはなくなりますよ、まあ、その時はあなたもあなたが心の底から憎んでいる私と同じ存在になっていますがね。はずれの場合は知りませんがね」

そんな男の声が耳に入ってきたが今はそれどころではない。

「先ほどまでの威勢はどこへいったやら」　ため息をつくようにそう言つと、男はその身をひるがえしてどこかへと去ろうとする。

「待て」

おれは、己の体に鞭を打つてようやく二文字だけ言葉を発声できた。だが、それだけで、立ち上がることも、ましてや、まともに呼吸することもままならない。

そんなおれを見て、男は、また人を小馬鹿にしたような見下したような笑みを浮かべる。

「残念ですが、今のあなたを待っているほど、私は暇じゃない。しかし、安心なさい。あなたが、どんな存在になっても私への恨みを忘れずにいたら、また、会うこともあるでしょう」

そう言い残すと男は、スキップをするようにどんどん離れていく。

おれは、それを齒を嚙みしめて睨んでいることしかできなかった。

第一章：目覚め

暗い、ただ暗い闇の中、どうして、こんなに暗いのだろう。

その時、手に又メリとした気持ちの悪い何かが触れる。

それが、何か理解したおれは、昨日の記憶をかすかに思い出した。目の前が暗いのは目を閉じているからだ。

おれは、ゆっくりと目を開けた。見慣れないどこかの一室。そこに、おれは何かの上に乗って眠っていたようだ。

「また、やっちゃった」

視線を右に左に動かす、周りには死体の山、こいつらは全員おれと同じ存在だ。人をやめ、罪深き者へとなった元人間。唯一にして最大の違いは望んでなかったか望んでいなかったか、それだけだ。

おれが、死体を見ながら呆然としてみると、誰かが日常とかけ離れ殺戮の世界と貸したこの部屋に近づいてくる足音が聞こえてきた。その足音は、どこかで聞いたことのあるような音程でステップを踏んでいる。

そして、その足音はこの部屋の扉の前で止まった。

だが、何かガチャガチャやっていて、一向に入ってくる気配がない、そこで、おれは自分が鍵を閉めていたことを思い出した。

仕方ないので開けてやろうと上半身に力を込めた時、とんでもない音と共に扉が開いた、というより、壊れた。

「ヤッホー、生きてるか信也！」

扉を壊したことなど気にしていない口調で、おれ、真東信也の名前を呼ぶ少女が入ってきた。

「おう、元気そうだな、安心したよ」

「安心ね……とても、そんな風には見えないけどな」

心配した様子など微塵も見えないほど明るい少女に向かって、おれは皮肉を込めて言う。

「何言っただよ、ぼくがどれだけ心配したか、心配し過ぎて十時

間しか寝られなかったよ」

「……十時間もか？」

この少女の名前は栗原玲奈、黙っていれば、小さい体型に大きな瞳、綺麗なサラサラとした黒髪と可愛いのだが、性格を知っている奴から見れば、可愛いより、生意気や憎たらしいという方が勝る。

「で？ 何しに来たんだお前、それとも、ついに即断者をやめさせられて雑用の後始末屋になったのか？」

「違う！ 本当にお前って生意気だよなあ、ぼくにそんな口を聞くのはお前くらいだよ」

まあ、玲奈が怒るのも無理はない。何せ、即断者と後始末屋では天と地ほどの差があるのだから。

「だいたい、お前、ぼくに恩があるの忘れてないだろうな？」

「はいはい、安心しろ忘れてないよ」

そう、おれはこの玲奈という少女に一生をかけても返せないほどの恩がある。

三年前のあの日、死にそうなおれを助けてくれたのはこいつなのだ。あいつが、去った後、玲奈は様子を見ていたのかすぐに駆けつけてくれ、今おれが所属している罪深き者達に対する唯一の組織断罪者に運んでくれたのだ。

そして、罪深き者になってしまったおれを即断者に推薦して組織に入れてくれたのも玲奈だった。

「で、結局何しに来たんだよ？」

おれが、そう言うとき玲奈は呆れた顔をして壁に張られた血がべつとりとついてるカレンダーを指差した。

「お前のことだから、忘れていると思ったよ。今日は学校の日だよ」

「ああ、そう言えばそうだったな」

昨日は日曜日だったので祝日でもない限り学校があるのは当然か。「学校か……別に高校二年だし、義務教育じゃないんだ、別に行かなくてもよくないか？」

ため息混じりにおれが言うと、玲奈はムツとした顔になる。

「お前は、すぐにそう言うこと口にするな、それに聞いた話じゃ、わざと人を避けてるって聞いたぞ、学校が面白くないのは友達を作らないからだよ」

「……別に避けていないさ、ただ、やっぱり、あいつらは普通の人でおれは」

その先を言おうとしたおれの口を玲奈が塞ぐ。

「罪深き者だつて言うんだろ？ それは、聞き飽きた」

言いたいことを言われたおれは言葉を失って黙ってしまった、そんなおれを見て玲奈はさらに続ける。

「そりゃあ、罪深き者つてだけで保護者や何人かの生徒は信也のこ
と軽蔑した目で見るけど……そんなの関係ないじゃん！ ぼくみた
いに気にしていない奴だつて沢山いるし、それにお前だつて、望ん
でなつたわけじゃないんだつて、ぶはっ」

おれは、玲奈の口を止めるために頭をなでくり回す。

「もうその辺でいいよ、ありがとよ」

「そうか？ ……そうだな！ よし、学校に行こう」

玲奈は、無理やり明るく振る舞つて言った。

そんな玲奈には悪いが、やはり、玲奈や普通の人とは違いやつぱり、おれは罪深き者だ。あの街が燃やされた日、どんな形であれ、一人生き残つて再び普通ではないが平穏を手にしようとしているのだから、それを考えたら、おれは学校で友達を作つて仲良く平穏に過ごすことなんてできなかった。

「ほら、早く来いよ！」

いつの間にか外に出ていた玲奈が外からここの部屋に聞こえるようにおれを呼んでいる。

外に出るためにドアノブに手をかけたおれは、視線を動かして、中にある罪深き者達の死体を見る。

「おれも、最後はあんた達みたいになるのかもな」

その声は、誰にも届かず、壁に跳ね返って自分に返ってきた。

第二章：聖火市

「なあ、信也」

あの後、玲奈とわかれて一度家に帰ってから、学校に来たおれに、この学校で唯一、おれの名前を呼び捨てにして馴れ馴れしい男霧間信朗が話かけてきた。

「何だよ？」

こいつに関しては、返事を返さないとずっと話かけてくるのでおれも無視をするわけにはいかなかった。

だが、何となくそれがうざったいと感じることがないので不思議な奴だ。

「いやいや、お前今朝は玲奈ちゃんと一緒に登校してなかったろ？」

どうしたのかなと思ってさ、喧嘩でもしたか」

「仕事場に今朝までいたんだよ、それに別にしたくていつも一緒に登校してるわけじゃない、あいつが無理やり学校におれを連れて来るんだよ」 玲奈は、おれが学校をすぐにサボるので毎朝迎えに来る。そして、途中で家に帰らないか見張ると言っについてくるのはたから見れば一緒に登校しているように見えるらしい。しかし、わざわざ返答したというのに霧間は話を聞いていないようにおれの体をマジマジと見ている。

「何見てんだよ」

「いや、お前仕事ってことは罪深き者と戦ったってことだろ？ 大丈夫かよ」

おれの所属している組織断罪者は本来は裏の組織だったのだが、罪深き者達の動きが表だってきたおかげで、それに対する組織として一般市民にも公開されている。

だから、おれが断罪者であり、罪深き者であることはこの聖火高校どころか断罪者の本部があるこの場所聖火市の一般市民にも知れ渡っている。

本来、そういうのは隠すものなのだろうが、断罪者の長である正直者で有名な新堂誠一郎は裁判官という一応トップであるはずの八人の老人達を無視して、本部を置かせていただいているのだからこの聖火市の彼らには少しばかりでも我々のことを知る権利があると主張して、情報を公開したのだ。

当然、裁判官の連中や、政府などは怒り奮闘だったが、おれや玲奈のような実際に動いている者は、特に気にはしていない。皆、裁判官より、新堂誠一郎の方を信頼しているからだ。

「別に、特に怪我は負ってないよ」

そう言って、腕を回したりして健全をアピールする。

「そうだよな、なんたって信也だしな」

「それどういう意味だよ」

霧間はいつもはふざけているのに怪我とか重要なことになる親身になって心配する。それがこいつをうざったいと感じない理由かもしれない。

その時、ざわめくクラスの中、前の教室のドアが開いて、中年ぶとりなのか、少しお腹が膨らんでスーツを息苦しそうに着ている男が入って来た。

「何だ、田淵もう来たのか、じゃまた後でな信也」

クラスの担任田淵秀和を呼び捨てにして、霧間は自分の席に向かって行った。

窓際に席があるおれは窓をのぞいてため息をついた。

「めんどくさいな」

これから、授業が始まると思うと鬱でしうがなかった。

普段騒がしい人が居眠りをしているおかげで静かな教室。その教室に間の抜けた電子音が鳴り響いた。このチャイムを聞いて、おれは大きなアクビをした。一番前の席の霧間が立ち上がりこちらに向かって来る。

「飯食おうぜ、信也」

コンビニの袋を軽く上げていつもの場所に行くぞとアピールする。
「わかったよ」

おれも、コンビニの袋を片手に立ち上がる。そして、いつもの屋上に向かった。

屋上のドアを開けるとすでにそこには二人の先客がいた。

「遅いぞ、信也」

「こんにちは、信也さん、霧間さん」

いつもより2分くらいしか遅れてないのに怒っている玲奈と屋上に吹く風になびく繊細な栗色の髪をして礼儀正しく挨拶をした天宮鈴の二人だ。

「こんにちは、天宮さん。いつもその顔膨らませている奴の子守は大変だろ？」「いえ、今日はめずらしく大人しかったですよ、ね！」

そう言つて、天宮は玲奈に向かって学校でもピカイチと評判の明るい笑顔をする。

だが、天宮に悪気はないのだろうが身長の高さから子供扱いされることを嫌う玲奈は怒り浸透だ。

「いつも言っているだろ鈴！ ぼくを子供扱いするな！」

「え？ 別にしてないよ」

そう言いながらも玲奈の頭を撫でる天宮、玲奈は何を言っても無駄と悟ったのかため息をつく。

この二人はいつもこの調子なのだ。玲奈と天宮は同じクラスなのだが同じなのはそれだけではない。コンビニのパンを食べていると天宮が口を開く。

「あ、そうそう信也さん。昨日の任務ご苦労様でした。今頃は後始末もすんでいる頃だと思います」

そう天宮は断罪者の一員なのだ。おれより、二年先輩でオペレーターみたいなことをしている。それに、多少戦闘の心得もあるようだ。

「ん、ああ、そうか」

おれが気のない返事を返すと天宮は一呼吸おいて、また、しかし今度は真剣な顔をして話し出す。

「それで、信也さん。後始末の方からよく聞かされるのですが、信也さんのやり方には迷いと言つか情けがあると……」

そう言つと天宮は、さらに真剣な目つきで睨みつけてくる。

「信也さん、あなたがどういつつもりかは知りませんがそのままだとあなたが死にますよ？」

いつになく真剣な天宮、その真剣さに思わず頷くことしかできなかった。

おれが頷くと天宮は微笑む。

「信也さんはやさしすぎるんです。やさしいことは悪くないです。でも、お願いですから断罪者の一員として動く時は心を鬼にしてください」

おれのことを本当に心配してくれているのだろう。天宮の一言、一言が重い。

「ああ、約束するよ天宮さん」

「どうだかね、信也の甘ちゃんぶりは筋がね入りだからね」 玲奈が小馬鹿にするように発売する。そして、おれの横に座っていた霧間も顔をしかめる。

「鈴ちゃんの言つとおりだぜ。ただの一般人のおれが言つのも何だが罪深き者とはいえ人を殺すことに抵抗はあるかもしれないけどよ相手は容赦なくお前を殺そうとしてんだ、こっちも容赦なしでいかないといざという時しくじるぞ」

三人にここまで言われると何も言い返せなかった。

確かに、情けや同情から手を抜いているのは凶星だった。だが、どうしても罪深き者になったからといってそいつが完全な悪だと思いたくないのだ、それに、そうなると、なりたくてなったわけじゃないとしても罪深き者のおれも悪ということになる。

「すみません、やっぱり仕事の話は食事中にするものじゃなかったですね」

おれが黙ってしまったので場の空気が悪くなってしまった、でも、それはおれが黙ってしまったからで決して天宮が悪いわけじゃない。「何言ってるんだよ、天宮はおれのために忠告してくれたんだろ。ありがとな。さ、気を取り直して飯食べよう」

「そうそう、鈴が落ち込むことないって、馬鹿な信也が悪いんだから」

「はい、すみません」

そして、再び食事が再開され、やっと、落ち着いて飯が食べられると思った矢先、天宮の赤いケータイが鳴り響いた。天宮に似合わないその赤いケータイは見たことがあった。確かあれは天宮の仕事用の緊急時のケータイだったはずだ。

「はい、こちら天宮どうしました？」

天宮は冷静に電話にでて内容を確認めている。そして、電話が終わるとすぐに立ち上がりおれと玲奈を見る。

「罪深き者が現れて、聖火市二丁目のファミレスが襲われたわ。霧間君は、先生に連絡をお願い」

霧間は、頷くとすぐに屋上のドアへ向かって行く。「よし！行くぞ信也！」

おれと玲奈も立ち上がる。だが、その時、耳の鼓膜を突き破るほどのものすごい轟音が鳴り響いた。

「何なの？」

音のした方を慌てて見る。屋上にいたのでそれはよく見えた。聖火市の一部が真っ赤に染まっているのが、

「おいおい、あれもファミレスを襲った奴の仕業か？」

「わからないわ、とりあえず、急いで本部に向かいましょう」

おれと玲奈は頷いて屋上から飛び降りる。何が起きているのかはわからないが、今はとりあえず本部に向かわなくてはならない。

だが、その時気のせいかもしれないが何か違和感のようなものを背後から感じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1022b/>

断罪者

2010年11月24日06時14分発行